

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K09191

研究課題名(和文)長期ひきこもりと現支援の有効性の検証と新たな支援システム開発

研究課題名(英文)A study of how hikikomori period overstretched and how effective is the existing services, and the development of a new support system

研究代表者

ヨン キム・フォン・ロザリン (Yong, Kim Fong Roseline)

秋田大学・医学系研究科・助教

研究者番号：40771796

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本調査では、地方のひきこもりの有病率は全国平均より約4倍上がることが分かった。また、ひきこもりのメンタルヘルスの特徴として、男女差と年齢差を明らかにした。精神科受診歴の有無はひきこもり者の自殺のリスクに影響するが、対人関係への苦手意識には影響しないことをわかった。また、アクションリサーチを用い、ひきこもり者と一緒に当事者が利用したがる居場所のあり方を検証し、実践的なピアスタッフプログラムを開発した。ピア・スタッフとして、当事者が「働ける」「働けない」、その仕組みについて明らかにした。本調査における研究活動は、実践公衆衛生学研究と連動する中で「理論と実践の往還」という大きな役割を果たしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：本研究は革新性がある新たなひきこもり支援プログラム「ふらっと」を開発した。また独創性がある実践的新たなピアスタッフプログラムを開発した。

社会的意義：本研究で考案したひきこもりの当事者と地域の人々が参加する居場所、ワンコイン・カフェ「ふらっと」や勉強会など地域に根ざした幅広い精神衛生活動は秋田県のみならず全国的にも高く評価されています。当事者が考慮した場づくりが柔らかな雰囲気がかもし出す、行政や一般の支援団体と比べると利用しやすさがすぐれる点に比較優位性を認められた。また、その有用性として、長期ひきこもりが社会復帰する例が数々。

研究成果の概要(英文)：The study found that the prevalence of withdrawal in rural areas is about four times higher than the national average. In addition, it was found that there are gender and age differences in the mental health characteristics of the withdrawn persons. The presence or absence of a history of psychiatric consultation was found to affect the risk of suicide among the social withdrawalers, but not their difficulties with interpersonal relationships. Using action research, we also examined the kind of places that socially withdrawn people would like to go. We also developed a practical peer staff program. We clarified the mechanisms by which parties "can" and "cannot" work as peer staff. Research activities in this study played a major role in "Theory and Practice Reciprocity" in conjunction with the Public Health Practice and Study.

研究分野：精神保健、公衆衛生実践学

キーワード：ひきこもり 疫学 居場所 ピアスタッフ 公衆衛生実践学 精神保健 メンタルヘルス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

日本の第1回世界精神衛生調査(2004-2006年)で、ひきこもりの生涯有病率は1.6%、また0.56%の家庭(約26万世帯)にひきこもりの子供がいると示されたが、2010年の内閣府によるひきこもりに関する実態調査では、一次性ひきこもりの出現率は1.79%であった。ひきこもりとは6ヶ月以上社会参加していない、また家族以外の人と親密な関係を持っていない状態と定義される。精神科疾患におけるひきこもりは二次性ひきこもり、精神障害が第一の原因とは考えにくいものは一次性ひきこもり(社会的ひきこもり)と定義されている。社会的ひきこもりの原因として、日本や香港では学力を優先する教育システムに反応した不適応性障害、社会構造と経済の変化による将来への不安などが推測されている。

ひきこもりの支援・治療は薬物療法、福祉的支援、そして社会的支援が中心になるが、ひきこもりの課題の縮小を見られていない。原因として、家族の方が求めているとひきこもり当事者に支援を届けられないのが一つ。もう一つは、当事者のニーズに支援が合っていないと指摘されている。長期化しているひきこもりの当事者とその家族が抱えるニーズと提供されている支援のギャップの解明が喫緊の課題であり、ニーズに合う支援システムの開発が社会的に求められている。本研究代表者は、ひきこもりの当事者とその家族の視点からひきこもりの状態は3つの心理要素(無気力感、他人を信頼することが難しく正直に自分の考えや気持ちを伝えることが難しい、自己否定が強い)から生まれたアノミー的状态であることとその対応方法を示した。ひきこもりから立ち直りとしてもこの三つの点に鍵があると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、長期化しているひきこもりの当事者と家族に焦点をあて、長期化しているひきこもりの当事者とその家族が抱えるニーズと提供されている支援のギャップを解明し、従来の支援の有効性を検討した。さらに、ひきこもり当事者とその家族に支援を届けるために、ひきこもり当事者や家族が地域コミュニティとつながるような具体的な支援の在り方を検討し、より効果的なひきこもり支援策を開発する。本研究の成果は、長期化ひきこもりの予防や早期対応の方策開発につながるものである。

### 3. 研究の方法

#### (1) ひきこもりの特徴の量的調査

##### (1-1) 内閣府ひきこもり実態調査2010の二次分析

ひきこもりの定義：

「ふだんどのくらい外出しますか」について、下記の5～8に当てはまる者

- 5. 趣味の用事のときだけ外出する
- 6. 近所のコンビニなどに出かける
- 7. 自室からは出るが、家から出ない
- 8. 自室からほとんど出ない

その状態で6か月以上経過する者。

その状態になったきっかけが、統合失調症、身体的病気、妊娠、自宅で仕事や出産・育児する者はひきこもりから除外する。

東京大学社会科学研究所・附属社会調査・データアーカイブ研究センターに公開されたデータを用いて、データクレンジング及びメンタルヘルスの特徴が示された調査項目を五分類(自殺の危険因子、対人関係苦手、暴力傾向、強迫性行為、依存性傾向)し、ひきこもりの属性、ライフイベント、幼少期の家族・友人・学校関係、調査当時の家族関係、メンタルヘルスの状態を明らかにした。基本的な特性と関心のある変数は、独立性のカイ2乗検定(Yateの連続性補正あり)、効果量ファイル係数、CramerのVで算出された。ポストホック分析により、ひきこもりと正確な個別項目との関連性を調べた。精神医学の要因の多目検定の多重比較問題の可能性を考慮し、有意水準は項目数で調整した。多重ロジスティック回帰分析では、3つのモデルを採用した。モデル1はすべての基本的特性で調整し、モデル2は試験したすべての精神医学の要因でさらに調整、モデル3はモデル2で試験した要因に加え、精神科治療歴で調整した。すべての分析はSPSS v.17.0を用いて行い、有意水準は $p < .05$ であった。

##### (1-2) 秋田A町こころの健康と社会参加に関する調査の二次分析

ひきこもりの定義：

「社会参加(学校に行く、職場に行く、地域・自治会の行事に参加する、ボランティア活動をする、老人クラブ活動をする)をしておらず、家族以外との親密な対人関係がない状態が長く続いていることはありますか？」

「ある」と答えた者で、その状態で6か月以上経過する者。但し、身体障害及び統合失調症、妊娠、育児する者などをひきこもりから除外していない。

#### (1-2-1) 秋田 A 町こころの健康と社会参加に関する調査 (2012)

15~64 歳の全町民を対象に自記式質問紙を用いた留置法 (健康推進員による配布回収) にて実施した。調査時 (2012 年 8 月現在) の総人口 (15~64 歳) は 4515 人 (入院、入所中を除く)。調査に回答した 3059 人、回答率 67.8%であった。本調査はすべての調査項目に回答した 2459 人を分析対象とした。本研究は若年層 (15~29 歳) と中高年層 (30~64 歳) のひきこもりの特徴、ひきこもりの男女差とメンタルヘルスを明らかにした。精神的健康の評価の指標として、K6 を使用した。13~24 点を“重度不安症状・うつ症状”とした。

#### (1-2-2) 秋田 A 町こころの健康と社会参加に関する調査 (2015)

15~59 歳の全町民 (入院、入所中を除く) を対象に自記式質問紙を用いた留置法 (健康推進員による配布回収) にて実施した。調査時 (2015 年 8 月現在) の総人口 (15~59 歳) は 3227 人。調査に回答した 2315 人、回答率 71.7%であった。本調査はすべての調査項目に回答した 989 人を分析対象とした。本研究はひきこもりと一般群を比較し、生活習慣、ソーシャル・キャピタルを明らかにした。解析はすべて SPSS v. 17.0 を用いて行い、有意水準は  $p < .05$  であった。

#### (1-2-3) 秋田県の性別・年齢別の自殺リスク順位 (2015 年~2019 の 5 年計)

秋田県保健・疾病対策課の協力を得て作成した。自殺総合対策推進センター「地域自殺実態プロファイル 2020」厚生労働省「自殺統計」(自殺日、居住地) 各区分の自殺死亡率の母数とした推定人口については、平成 27 年国勢調査就業状態等基本集計を用い、労働力状態が「不詳」の人口を有職者と無職者 (労働力人口のうち「家事のほか仕事」、「学業のかたわら仕事」と失業者および非労働力人口の合計) に按分した。

### (2) 日本と香港の「ひきこもり支援」交流活動

香港特別行政区の社会福祉部署での青年および感化服務課の管轄にある地域福祉サービス事業を委託された非政府組織 Hong Kong Christian Service Center (HKCSC) がひきこもり支援現場の取材やひきこもり当事者との交流を行い、秋田県のひきこもり対策の有識者会議を開いた。また、学者と現場から見られた日本と香港の若者のメンタルヘルスの課題やひきこもりの定義とアプローチの違いから、国際若者メンタルヘルス支援フォーラムを開催し、当事者・家族・学者・行政を含めた支援者の多職種会話の場を設けた。本研究の調査対象者はひきこもり当事者、家族、一般住民、自殺とひきこもり支援者、行政、日本の研究者、香港のソーシャルワーカー及研究者。「国際若者支援フォーラム」の交流内容と若者ワークショップの内容を用い、KHCoder3 で分析した。

### (3) 社会的ひきこもりの形成・維持過程の質的研究

本研究代表者が 2006~2009 年に収集した質的のデータ (録音データ、保存したチャットスクリーンショット、インタビューメモ) をもとに、それぞれの特徴を明らかにするために、オープンコーディングの段階でデータをコード化し (協力者の年齢・性別・当事者との関係・話題など)、切り分けた内容からプロパティ (キーワードは状況を把握するための 5W1H (Why (なぜ)、What (何を)、Where (どこで)、When (いつ)、Who (誰が)、How (どのように)) 原則の中にその状況の何を指しているか) とディメンション (5W1H の具体的な内容・説明) を抽出し、ラベル名をつけた。データを継続的に比較分析し、さらに概念を抽出し、カテゴリーを生成し、カテゴリーの妥当性を深めながら精密化していき、カテゴリー間の関連について考察し、結果図としてまとめた。分析を進める段階 (分析テーマの設定、概念の生成時ほか) で共同研究者間で意見を出し合いさらに分析を深めた。

### (4) 長期ひきこもりの社会復帰に関する支援法を開発

長期ひきこもりとは、活動範囲が狭い者 (人と関わらない、必要性がない外出を抑える者) のひきこもり期間が 3 年を超えた者、と活動範囲が広い者 (支援者やほかの当事者と関わるために外出する者) のひきこもり期間が 5 年を超えた者とする。秋田県大仙市に拠点を置き、機縁法で長期ひきこもり者を集め、アクションリサーチを用いて当事者が行きたくなる居場所はどのような場所なのか、支援にどのような指標と効果を求めるべきなのか、当事者に支援をどのように届けるのかを検討した。

### (5) 研究成果のまとめと情報発信

成果をとりまとめ、学会や論文に発表し、研究の知見を、地域研究会を通して各関係者と現場の実践に積極的に還元し、本研究代表者の研究ブログからも情報を提供した。

## 4. 研究成果

### (1) ひきこもりの特徴の量的調査

#### 1.1 ひきこもりの有病率と地域の格差

本調査では、地方のひきこもりの有病率は全国平均より約 4 倍上がることが分かった。内閣府の調査では、ひきこもりの有病率は 1.45%~1.79%だったが、秋田県 A 町の調査では、15 歳~64 歳の住民の 6.7% (2012 年)、15 歳~59 歳の住民の 7% (2015 年) がひきこもりに該当し、そのうち 45.7% は他人と交流していない期間は 10 年以上であった。内閣府と秋田県 A 町

の調査でひきこもりの有病率に大きな差があり、その違いは調査に用いたひきこもりの定義と調査方法の違からに生じたと考えられる。なお、秋田県 A 町の調査員は地元のヘルスポランティアであり、対象者と一定の関係性を持っているのが特徴である。ネガティブなヘルスアウトカムを過小報告したりポジティブなソーシャル・キャピタルを過大評価したり社会的望ましさによるバイアスが働くことを考慮し、ひきこもりの有病率は本調査の結果より高い可能性がある。2021年10月1日現在の秋田県の総人口は944,874人、世帯数は385,720世帯である。ひきこもりの有病率の推計(1.57%~6.7%)から、秋田県に住む15~64歳生産年齢人口496,171人の中に、ひきこもる者は7,790人から33,243人、ひきこもりの子どもを抱えている世帯は少なくとも2,160世帯(0.56%有病率)と推測される。

#### 1.2 ひきこもりの男女差

男性のひきこもり群は一般群より様々な精神的な不安要素を抱えている。女性は、ひきこもりの有無にかかわらず多様な精神的な不安要素を抱えているが、相談相手がいればひきこもりの有病率が半減する。

#### 1.3 ひきこもりの年齢層とメンタルヘルスリスク

若年層のひきこもりは一般群とメンタルヘルスリスクにおいて差はないが、中高年層のひきこもりは一般群より様々な精神的な不安要素を抱えている。

#### 1.4 ひきこもりと自殺の関連

内閣府調査の二次分析では、ひきこもり者は自殺の危険因子と対人関係の困難を抱えている。精神科受診歴の有無はひきこもり者の自殺のリスクに影響するが、対人関係への苦手意識には影響しない。ひきこもりの男性は一般群より自殺念慮が高く、こころの不調があり体力的に自信がない、抑うつ傾向や不安、孤独感や孤立感を感じやすい。ひきこもり者の自殺要因はその存在感の曖昧さに鍵があるとも考えられる。秋田県の2015~2019年5年間の自殺リスク(自殺率)が高い群の順位(上5位)は、40~59歳の無職独居男性、40~59歳の無職同居男性、20~39歳無職独居男性、60歳以上の無職独居男性、20~39歳の無職同居男性、である。自殺対策では、無職の男性の数が少ないため、対象者を絞りやすく、自殺対策の効率も良くなると考えられる。これらの男性はひきこもりの有無はこのデータから判別できないが、実際男性の無職者とひきこもりとの関係が非常に高いと考えられる。

### (2) 日本と香港の「ひきこもり支援」交流活動

#### 2.1 ひきこもりの定義の訂正と実態の把握が必要

交流会には、香港の研究者2名、香港の支援者10名、日本の学者(山形・長野・秋田・東京)7名、行政10名、当事者を含む一般市民57名、若者・ひきこもり支援団体5団体が参加した。当事者・家族・行政を含める支援者がひきこもり支援に関しての多様性と現場の問題意識について討論した。その結果、医療関係から見るひきこもり、社会福祉関係から見るひきこもり、また心理学関係から見るひきこもり、それぞれが違っていると分かった。これから学術調査していく上に、ひきこもりの定義を訂正する必要があると考えられる。また、公衆衛生学の観点から(医療・社会福祉・心理・行政・本人、様々なキーパーソンの連携が必要)ひきこもりの出現率や社会背景など整理する必要が考えられる。国際協力調査の促進が若者支援に役に立つと考えられる。今後の研究の方向性として①秋田県の若者の実態調査、②若者のひきこもりと高齢者のひきこもりの調査、③都会と田舎の比較調査、と④国際の比較調査が必要と考えた。

#### 2.2 ひきこもりの背景と支援のギャップ

若者ワークショップに参加者8人、うちひきこもり当事者6人、行政1人、学生1人。当事者のいずれも複数の支援機関と関わってきた者だった。当事者が意識したディスカッションに、4つのテーマを挙げた。「不登校やひきこもり時の悩み」、「支援を受けて思ったこと」、「働く願望について」、「意識の変化でひきこもり状態が変わる」。支援していく中で良いと思われるのは、支援者の思いを当事者に強制しないことであった。ひきこもりの状態に関して引け目を感じなくなれば外に出られるとの主張があり、ひきこもりの状態は本人の意識と関連することが分かった。なお、同じ当事者でも価値観と求める支援がそれぞれ違っても分かった。その違いは当事者の年齢、ひきこもりになった背景、ひきこもりの年数(期間)、家族の経済的ゆとりと関連すると考えられる。ひきこもり当事者の、ひきこもりになった原因を確認することなく、ひとくりに扱おうと、ひきこもりの実際が見えなくなることがあることを再確認した。いわゆる支援のギャップが発生した。ひきこもりの支援者がそのギャップを埋めるためにここで工夫しなければいけないことは、①当事者がひきこもりになったきっかけを知ること、②今までどのような支援を受けてきたのかという経過、③経験した支援の中で、うまくいった支援とうまくいかなかった支援、その理由の確認。

### (3) 社会的ひきこもりの形成・維持過程の質的研究

#### 3.1 ひきこもりの発症時期について親と本人の認識のギャップ

本研究は精神障害が第一原因でないひきこもり経験者の体験に着目し、9名から情報提供を受けその特徴(性別、年齢、国籍、学歴、不登校経験、就職経験、ひきこもり歴、きっかけ、状況)を多文化の視点で、ひきこもりの形成・心の構造を探索した(図1)。

本調査では、「ひきこもり段階」について、家族からの情報提供により、いつ頃から部屋から出られない時間帯が生じるようになったか、本人からの話から「準備段階」「開始段階」「ひきこもり段階」「ひきこもり持続段階」を自分の中で認識しているか、その時期が曖昧で、自分自身もはっきり把握できていなかったと考える。

研究協力者	性別	年齢	接した場所	接する期間	インタビューの形・回数(場所)	当事者との関係	当事者の名称
1	女	24	香港	2007.02-2008.06	対面・3回(大学カフェ)	従姉	A
2	男	38	韓国	2007.08-2007.08	対面・2回(宿舎ロビー)	兄	B
3	男	24	インターネット	2007.10-2009.08	スカイプチャット・12回 電話・2回	本人	C
4	女	38	インターネット・日本	2008.01-2009.05	スカイプチャット・12回 対面・2回(住宅)	本人	E
5	男	25	日本	2009.04-2009.04	対面・2回(宿舎ロビー)	本人	F
6	男	36	香港	2009.08-2009.08	対面・1回(宿舎ロビー)	従弟	G
7	男	58	マレーシア	2009.08-2009.08	対面・1回(会議室)	父	H
8	女	55	マレーシア	2009.08-2009.08	対面・1回(会議室)	母	H
9	女	53	マレーシア	2009.09-2009.10	対面・2回(会議室)	姨	H

図1 理論的サンプル研究協力者の概要

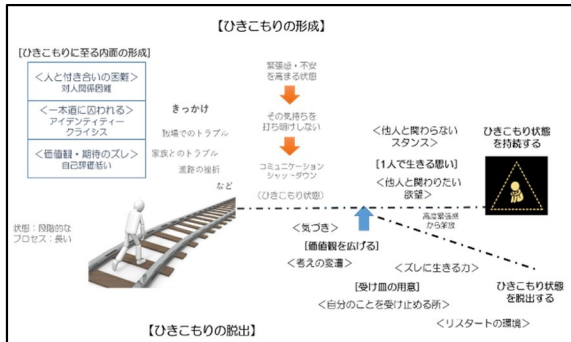


図2 ひきこもりの体験の心理的変容プロセス

### 3.2 ひきこもりを脱出する鍵：「受容」と「話す」

継続比較分析の結果、10個の概念を抽出し、4つのカテゴリーが形成され、【ひきこもりの体験】と【ひきこもりを脱出】との2つのテーマに凝縮した。周囲の受容があるともう少し気楽にできることと、自分のことを話す機会があることで客観視が出来、自然に行動の変容が伴う。本調査の結果に基づいてひきこもりの体験の中の心理的な変容プロセスを検証した(図2)。

#### (4) 長期ひきこもりの社会復帰に関する支援法を開発

本研究は当事者を巻き込むアクションリサーチ手法を、ひきこもりの当事者が行きたくなる居場所のあり方を検証した。また、実践的かつ新たなピアスタッフプログラムを考案した。

居場所を通して、普段会えない、語れない当事者のニーズを直接聞き、ニーズに沿った支援ができた。実際に、ピア・スタッフとして、当事者が「働ける」こと。その仕組みについて明らかにした。また、ピア・スタッフとして参加した後も、「働けない」事態が生じること。その仕組みについて明らかにした。関係機関が、支援の手を差し伸べても当事者や家族に受け入れられないケースが相当多い。その仕組みについて、当事者および関係機関それぞれの要因を明らかにした。

##### 4.1 「ふらっと」：同じ目線・共通の話題を強調するピア・サポート

居場所は週5日の開催、活動は当事者研究のようなtalk therapyが多く、一般のケアや作業所との違いは、医師、臨床心理士や福祉などの専門家が同席しないこと。同じ目線と共通の話題があるふらっとな関係性に、コミュニケーション力(お互いの話を聞ける、考えやアイデアを伝えられる)、受容力(自分も相手も受け止められる)、共感力(お互いの立場に立って考えられる、お互いの気持ちを想像できる)、問題解決力が養われていく中で信頼関係を構築する力(お互いの関係性やお互いが求めること、気を遣うべきことと気を遣わなくてよいこと等を見極められる)、自分を見つめる力(自己分析力)が自然に身に付けていく力を検証された。

##### 4.2 地域の偏見や自分自身に対する偏見の低減によるひきこもり脱出

市民に対する公開講座で年1回当事者体験談、一般大学生と医学生年2回の交流、社協や民生児童委員会研修会に居場所づくりの知恵を共有しひきこもりに対する理解を深めた。また、大仙市の協力を得て、広報に「ひきこもり」を一緒に考えてみましょう」連載コラム、不登校やひきこもりの特徴が分かりやすい啓発チラシを定期的の大仙市全戸配布、秋田県全県中高校の保健室に配布し、不登校とひきこもりに対する理解を深めていくことを求めた。これらの活動に、利用者が徐々に行動の変容を見られ、居場所はひきこもりの社会復帰に相当し、自分を見直す「内省」と「再出発」を可能にした三次予防的役割を明らかにした。

##### 4.3 医療支援のギャップを改善

ピアスタッフが主導している居場所の効果は、笑顔が増えること、自ら他人に声をかける行動、自立に向けた取り組みの参加、Patient Health Questionnaire-9 (PHQ-9)からみられるうつ症状の改善、同行支援による主治医とのコミュニケーションの改善、向精神薬の減量、自傷・自殺行為の減少傾向で定義し、年4回以上の利用があったものに改善傾向が見られた。

居場所でのひきこもり支援に求める指標は、ひきこもり者が①ひきこもり受容に対する意識の変化、②日常のこころの健康や表情の変化、③物事に対する積極性、④主治医とのコミュニケーションの向上、⑤家族関係の修復、⑥問題解決に対する自己効力感の向上と考える。

#### (5) 研究成果のまとめと情報発信

本研究は、ひきこもり当事者や家族が地域コミュニティとつながるような具体的な支援の在り方を検討し、当事者が利用しやすい居場所「ふらっと」を考案した。成果をまとめた冊子を関係機関に配布し、本研究代表者の研究サイトからも情報を提供した。これに基づき、ひきこもりの「ふらっと」回復式普及のための多職種連携研修会を行う予定である。また、情報提供とし、成果を秋田大学に設置されたウェブサイトに掲載する準備を行っている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 ロザリン・ヨン	4. 巻 59
2. 論文標題 なぜひきこもり? 「ふらっと」アプローチ: 自分を探る!	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 秋田県精神保健福祉協会機関誌	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Roseline KF Yong, Koji Fujita, Patsy YK Chau, Hisanaga Sasaki	4. 巻 67
2. 論文標題 Characteristics of and gender difference factors of hikikomori among the working-age population: A cross-sectional population study in rural Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 237-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.67.4_237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yong R, Nomura K	4. 巻 10:247
2. 論文標題 Hikikomori Is Most Associated With Interpersonal Relationships, Followed by Suicide Risks: A Secondary Analysis of a National Cross-Sectional Study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Front Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1 - 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyt.2019.00247	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yong R, Fujita K, Chau P, Sasaki H	4. 巻 67 (4)
2. 論文標題 Characteristics of and gender difference factors of hikikomori among the working-age population: A cross-sectional population study in rural Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nihon Kosshu Eisei Zasshi	6. 最初と最後の頁 237 - 247
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.67.4_237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 ヨン・ロザリン	4. 巻 1
2. 論文標題 地域におけるひきこもりの自立支援：ひきこもり経験者中心にしたピアスタッフシステムの効果検証.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田公衆衛生学会雑誌	6. 最初と最後の頁 26 - 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yong R, Nomura K	4. 巻 10 (247)
2. 論文標題 Hikikomori Is Most Associated With Interpersonal Relationships, Followed by Suicide Risks: A Secondary Analysis of a National Cross-Sectional Study	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyt.2019.00247	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yong R, 豊島 優人, 藤田 幸司, 佐々木 久長	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 ひきこもりと生活習慣、心理的要因及びソーシャル・キャピタルとの関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 秋田県公衆衛生学雑誌	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Roseline Yong, Akiomi Inoue, Norito Kawakami	4. 巻 17
2. 論文標題 The validity and psychometric properties of the Japanese version of the Compulsive Internet Use Scale (CIUS)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 BMC Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12888-017-1364-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ロザリン・ヨン	4. 巻 13
2. 論文標題 地域におけるひきこもりの自立支援：居場所のあり方 ひきこもりから踏み出す一歩 - 安心、仲間、繋がり	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 秋田公衆衛生学会雑誌	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 ロザリン・ヨン
2. 発表標題 (シンポジウム)共に考えるひきこもり支援～今、私たちにできることは～.
3. 学会等名 第60回精神保健福祉東北大会、秋田
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ロザリン・ヨン
2. 発表標題 (市民公開講座)不登校・ひきこもりの経験者と家族のための場づくり
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第31回学術集会、山形
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ロザリン・ヨン
2. 発表標題 (口頭)当事者にエンパワーメントプロセスによるひきこもり状況の変容
3. 学会等名 第70回東北公衆衛生学会、秋田
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 Roseline Yong
2. 発表標題 ひきこもりシンポジウムー研究と実践の循環『ふらっと』 混合研究手法を用いた ひきこもり自立支援への提言
3. 学会等名 日本公衆衛生学会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Roseline Yong
2. 発表標題 Empowering the hikikomori individual to recovery: coping, trust, existence
3. 学会等名 Mental Health Association of South-Eastern Europe (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yong R
2. 発表標題 Breakthroughs happen when you realize that you are not alone? A social community intervention for Hikikomori
3. 学会等名 Word Education Research Association, Gakushuin University Tokyo. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yong R
2. 発表標題 Hikikomori and childhood negative interpersonal relationship experience
3. 学会等名 第78回日本公衆衛生学会総会, 高知
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Washio K, Yong R
2. 発表標題 参与観察によるひきこもり社会復帰についての質的研究.
3. 学会等名 第66回秋田県公衆衛生学術総会, 秋田
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yong R, Sasaki H, Fujita K, Nomura K
2. 発表標題 The association between hikikomori and mental health: a national cross-sectional study
3. 学会等名 The 23rd International Association of Child and Adolescence Psychiatry and allied Professions (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yong R
2. 発表標題 Exploring the efficacy of a peer-support focused rehabilitation program on attitudes and behavioral changes for people with "hikikomori" syndrome
3. 学会等名 The 23rd International Association of Child and Adolescence Psychiatry and allied Professions (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yong R, Fujita, K, Sasaki H
2. 発表標題 Indicators for hikikomori in rural Japan: jobless and loneliness
3. 学会等名 第77回日本公衆衛生学会総会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Roseline Yong, Hisanaga Sasaki
2. 発表標題 Suicide Risk Factors in the young adults with hikikomori syndrome (prolonged social withdrawal)
3. 学会等名 The 29th World Congress of the International Association for Suicide Prevention (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Roseline Yong
2. 発表標題 Association between hikikomori (prolonged social withdrawal) and childhood and present family relationship
3. 学会等名 The 4th International Conference of Public Health (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ロザリン・ヨン
2. 発表標題 ひきこもり当事者中心の自立支援プログラムの実践報告 居場所のあり方
3. 学会等名 日本精神衛生学会第33回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ロザリン・ヨン、佐藤このみ、深川純一、藤井淳一
2. 発表標題 ひきこもりを乗り越えー僕たちの変化
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第25回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ロザリン・ヨン、佐藤このみ、深川純一、藤井淳一
2. 発表標題 ひきこもりから踏み出す一歩：安心、仲間、つながり
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第25回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤田幸司、ロザリン・ヨン、金子善博、佐々木久長、播摩優子、松永博子、本橋豊
2. 発表標題 多世代参加コミュニティ・エンパワメントの実践による地域づくり型自殺対策の効果
3. 学会等名 第76回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ロザリン・ヨン
2. 発表標題 地域公衆衛生の現場：ひきこもり自立支援モデル「ふらっと」、研究と実践の循環
3. 学会等名 第14回秋田県公衆衛生学会学術大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高塚雄介、影山隆之、寺脇研、田中治彦、三上雅幸、小泉典章、秋田敦子、高橋淳敏、池上正樹、ロザリン・ヨン、菅野綾、鈴木健一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 173
3. 書名 ひきこもりの理解と支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本調査で考案したピアスタッフプログラムでは、ひきこもり経験者を居場所のスタッフとして採用した。ピアスタッフの活動は居場所にとどまることがなく、啓発活動として、ひきこもり当事者であったピアスタッフとともに、年1回、地域に向けて、当事者、家族及び一般人に、自分の体験を伝える形で講演をしている。また、支援者へのエンパワメントとして、様々な支援団体に向けて研修会を行っている。本研究の活動は、2020年度秋田大学により女性研究者支援コンソーシアムあきた賞（若手研究者地域貢献部門）を受賞、秋田県仙北地域振興局により元気なふるさと秋田づくり顕彰事業にて表彰された。2021年度フィッシュファミリー財団・ジャパンオフィス Champion of Change Japan 25名のリーダー「CCJA2021 Leaders25」に選出され、公益財団法人 社会貢献支援財団より第56回社会貢献者として表彰受け、日本精神衛生学会 令和3年度土居健郎記念賞を受賞した。

令和4年5月～令和5年3月には、「長期ひきこもりと現支援の有効性の検証と新たな支援システム開発」の研究成果を行政や地域に向けて幅広く発信する準備をしている。活動はすでに秋田県のNPO法人として登録している。現在は、大仙市子ども・若者総合相談センターの事業を委託されているが、大仙市に限定されたこの事業のみでは解決できない課題がある。ひきこもり支援を推進するために、範囲を広げた、新たな事業を起こすことが必要である。秋田大学ベンチャーの認定を通し、「長期ひきこもりと現支援の有効性の検証と新たな支援システム開発」に関する研究成果の発信、現場に還元する実践をより幅広く行政、地域の支援者、教育委員会に発信していきたい。さらに新たな支援を担う、支援者の養成を新たな事業として立ち上げていきたいと考えている。

ふらっと  
<http://h4j-hikikomori.blogspot.com/>  
 特定非営利活動法人光希屋(家) 論文・発表活動

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 久長  (Sasaki Hisanaga)  (70205855)	秋田大学・医学系研究科・准教授    (11401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関